

P2-051

小児科診療所における産後ケア事業

酒井 敏恵¹、秋山 千枝子²、立花 良之³、林 美恵¹

¹Mama&Babyあきやま

²あきやま子どもクリニック

³国立成育医療研究センター

【目的】

核家族化が進み、妊娠・出産・育児を家族のみで行うことが増えている。また高齢出産の増加により、その親世代も高齢化しているなど、育児をサポートしてくれる人や相談できる相手がおらず、出産で疲れた心身で育児を始めなければならない母親が増えている。今回産後に困っていることや不安を感じていることを明らかにし、産後ケアのあり方を検討した。

【方法】

当産後ケア施設を平成30年7月から平成31年1月まで利用した51名、延べ利用者数162名を対象とし、利用申請書と実際に利用した際の聞き取りから分析した。

【結果】

利用申請理由（複数回答）は、母親の体力回復のためが74.5%、家族の支援がないが58.8%、授乳の相談が51.0%、育児手技の相談が37.2%であった。実際の利用時に疲労、体力回復、睡眠不足のためにゆっくり休みたくて希望した人は90.2%で、100%の人が授乳の時以外は子どもを預けて休息をとっていた。1回目利用時月齢は、0か月が11名、1か月が18名、2か月が11名、3か月が11名であった。授乳に関しては、72.5%が何らかのトラブルがあった。

【考察】

1回目利用月齢が1か月が多いのは、産後1か月は里帰りをしていたり、実母や義母などの家族の支援が産後1か月を目安にしていることが多く、急にサポートがなくなったことから疲労が蓄積したり、不安になったりすることが多いことが考えられる。産後ケアでは母親が安心してゆっくり休める環境作りが大切であり、授乳介助や乳房ケア、体重測定、母乳量測定、家庭での授乳状況の聞き取りを総合的に判断したアドバイスが必要になる。

P2-052

母親の産後うつの状況 ～乳児健診を通して～

梅田 可愛¹、秋山 千枝子¹、立花 良之²

¹あきやま子どもクリニック

²国立成育医療研究センター

【目的】

近年、核家族化が進み、妊娠・出産・育児を各家庭のみで経験していくことが増え、子育てを母親一人で行わざるを得ない家庭も多い。このような背景のある中、産後1年未満に自殺をした女性が2年間で92人というデータが発表されている。（国立成育医療研究センター調査、2018年）育児不安・ストレスによって起きる産後鬱が原因の一つと考えられている。我々は、地域の子どもたちと育児を行う母親を支える小児医療現場として現状を把握するため、乳幼児健診を通して母親のうつ状況を調査することにした。

【方法】

1、対象者：6, 7か月健診、9, 10か月健診、1歳6か月健診を受けにきた乳幼児の母親。2、研究期間：平成29年6月～平成31年1月。3、データ収集方法：健診時に看護師が口頭にて承諾を得て、質問。4、データ内容：うつに関する二質問法Aこの1か月気分が沈んだり、憂鬱な気持ちになったりすることがよくありますか。Bこの1か月、どうも物事に対して興味がわかない、あるいは心から楽しめない感じは良くありましたか。5、データ分析：月齢ごとに区分し内容分析によりカテゴリ化。

【結果】

6, 7か月健診受診の乳児の母親425人中A3人、B0人、AB両方2人。9, 10か月健診受診の乳児の母親444人中A6人B0人、AB両方4人。1歳6か月健診受診の幼児の母親534人中A4人、B0人、AB両方3人

【考察】

本調査の結果、全体の人数からは少ないが、うつ症状の見られている母親がいることが分かった。月齢による人数の相違はなかった。産後うつと自覚はない母親や、つらい状況を誰にも言えずに堪えている母親もいた。今まで乳幼児健診では、子どもたちの発育、健康状態の確認を行い、母親の体や心の状態を確認することは少なかった。育児を行っていく母親が心も体も健康でなければ、子どもたちが健康に育っていくことも難しい環境に陥ってしまう危険がある。産後うつ、その傾向にある母親を、早期に見つけケアにつなげていくことが大切だ。今回の研究の中でうつ傾向にあった母親には、医師からのアドバイスのもと、市の保健センターと連携を図り市のサービスの利用につなげた。今後も乳幼児健診の機会を利用して、母親の心と体の健康を確認していく作業は必要と考える。